

ニハセビクジラ内ニ油少ナシザトウクジラ油多ヲ用ユ筑前ニテハザトウクジラヲ上品トス、品類ノ
 形色ハ、鯨志平戸及大地ノ鯨圖等ニ詳ナリ、

〔毛吹草三〕伊勢 鯨

〔慶長見聞集八〕關東海にて鯨つく事

聞しは今唐國に鯨鯢と云魚は、長さ數千里あり、波をた、ひて雷をなし、沫をはきて、雨霧をなす、
 舟をものむと也、四足の魚と古記に見えたり、扱又日本に鯨と云魚有、けいノのたぐひと知ら
 れたり、長さ三十ひろ五十ひろ有、日本に是に過たる生類なし、愚老淨心三浦若き比、關東海にて鯨
 取事なし、死たる鯨東海へ流れよるを、人集て肉を切取皮をば煎じて油をとる事、度々におよぶ、
 然ば昔貞應二年五月、鎌倉近邊の浦々へ、名をも知ぬ大魚死て浪に浮び、三浦崎六浦の海邊へ流
 れよる、鎌倉中にじうまんす、人こそつて是を買取る、家々に是をせんじて油を取、異香りよこ
 うに満り、士女是を早魃の兆ざしと云、此魚の名知らず、先規になし、是たゞ事ならずと文に記せり、
 貞應の比まで關東海に鯨有事を人知らざる也、今は鯨江戸浦まで來て、うしほを空へ吹上るを
 見れば海上にやく鹽屋の烟かとうたがはる、是は息をする魚にて、海底に計りは居られぬと知
 られたり、古歌に、

うしほ吹鯨の息と見ゆる哉、沖に一村夕立の雲、是はつもの、浦によめり、江戸浦にては、沖に幾
 村立雲とこそ詠侍らめ、鯨をもちにてつくに鯨とるといふ、鯨は釣にてつるなるを、鯨とるとい
 ふ、是は海人共のぞろごと、思ひしに、八雲抄に鯨とる鯨とるとよめり、くじら大魚なれ共、伊
 勢尾張兩國にてつく事有、是より東の國の海士はつく事を知らず、然に文祿の比ほひ、間瀬助兵
 衛と云て、尾州にて鯨つきの名人相摸三浦へ來りたりしが、東海に鯨多有を見て、願ふに幸哉と、
 もり網を用意し、鯨をつくを見しに、鯨は子を深く思ふ魚也、故に親をばつかずして子をつきと